

八女の伝統工芸

江戸時代から情熱をもって伝えられ、発展してきた燈籠人形。その伝承のなかで、町の職人技術にも磨きがかかり、燈籠を作り上げる技術は、「八女提灯」を生み、人形や屋台の組立細工の技は「八女福島仏壇」へと繋がった。それらの伝統工芸の技術を、年間を通じて見学できる場所として、「八女伝統工芸館」「八女民俗資料館」「八女手すき和紙資料館」がある。

荘厳華麗な仏閣を夢見て 八女福島仏壇

燈籠人形の屋台の建築技術が大いに役立ったと言われる八女福島仏壇。もともと八女地方は古くから信仰心の厚い土地柄で、伝統のある寺が多く残っていた。

文政4年(1821)、指物大工の遠渡三作がある夜、荘厳華麗な仏閣の夢を見て思い立ち、同業者だった井上利久平、平井三作の両名に協力を求めて仏壇製造を志したといわれている。製造技術が確立されたのはもう少し後の嘉永年間(1850年頃)で、九州での仏壇製造の源流ともなっている。

仏壇の製法は彫刻、金具、塗装、蒔絵という加工の工程と総組立てに分けられ、全工程数はなんと80工程余り(!)木地、宮殿、彫刻の木工部分の一部を除いて、ほとんど手加工による伝統技法が継承されている。



竹と和ろうそくと和紙。産地は八女 八女提灯

燈籠人形にかかせない「提灯」。和ろうそくの原料である木蠟(蠟燭)、火袋の原料である和紙、骨の材料である竹、賀輪(がわ)の材料である木材・八女はこれら全てが揃っていた。

八女提灯(福島提灯)の始まりは文化13年(1816)頃に福島町の荒巻文右衛門によって作られた「場提灯」と伝えられる。主に仏壇用のものが多かった為、八女地方は益提灯の産地として名声を博してきた。

明治に入ると福島提灯に対する需要が急速に伸び、吉永太平の弟、伊平が早描きの描画法を応用して、大いに製造時間と価格を低減。また、形状・絵画・付属品等も年を追って工夫改良を施し、一部は米国、英国、香港、インド等の海外にも輸出された。そして、福島提灯は八女地方全域で生産されるようになり、「八女提灯」と呼ばれるようになった。

燈籠人形の技術を支えた伝統工芸

八女伝統工芸館

~Yame Traditional Craftwork Center~

八女伝統工芸館では、燈籠人形の技術を支えた八女地方の伝統工芸品を展示・保存。館内には日本一を誇る仏壇・提灯・石灯籠をはじめ、手すき和紙や久留米餅、木工品、竹細工など、八女を代表する工芸品・民芸品を展示。匠の実演も見学することができる。工芸品や特産品の販売コーナーもあり。



燈籠人形をいつでも見られる場所 八女民俗資料館

▲1F 燈籠人形屋台の実物大の複製。四季の農作業の様子を江戸時代の絵図と道具で紹介。

八女伝統工芸館のすぐ隣。館内には燈籠人形屋台が実物大で再現・展示されており、屋台がどんな仕組みになっているのかが一目瞭然。屋台の裏側に回って舞台裏を見ることもできるので、複雑な人形の動きもバッチリわかる!ここを見ておけば公演の下調べは完璧?!



◀2F 八女の産物を支える以下の道具などの紹介

- 八女の養蚕: 戦前まで行われた桑の栽培、養蚕に使った道具。
- 八女の石工: 古くから八女石灯籠作りに使われる道具。
- 八女茶: 釜炒り茶を製造していた頃の栽培用具。
- 和ろうそく: 蠟の原料の櫃(はぜ)の実や、和ろうそく作りの道具。
- 八女和紙: 「かごたき」や「紙すき」に使われる伝統的な道具。

手すき体験もできる

八女手すき和紙資料館

八女提灯にかかせない八女の手漉き和紙は、九州で最も古く400年の歴史を持ち、文禄四年(1595)、全国行脚の途中に立ち寄った日蓮宗の僧・日源上人が和紙の技法を伝授したことに始まる。八女の手漉き和紙は引きが良く、腰が強いことから愛好者が多く、版画家棟方志功もその1人。この資料館では原料づくりから和紙ができあがるまでの工程を見ることができ、体験ができる。



八女の
伝統工芸を見に行こう

「燈籠人形とその技術が、いつでも見られる場所」

八女伝統工芸館には、八女民俗資料館、八女手すき和紙資料館が併設されている。

DATA

八女伝統工芸館
〒834-0031
八女市本町(新町)
2-123-2 地図C-3
☎0943-22-3131
【HP】
<http://www.yame-kougeikan.jp>